

## ドン・ジュアンに観るバイロン像 (12)

楠 本 哲 夫

Byron and the Force of Circumstances

(バイロンと その環境、背景の力)

Canto 1 の終り頃で バイロンは、はっきりと 自分は叙事詩 epic を書いて  
いるんだと、のべている。

My poem's epic, and is meant to be  
Divided in twelve books ; each book containing,  
With love, and war, a heavy gale at sea,  
A list of ships, and captains, and kings reigning,  
New characters ; the episodes are three ;  
A panorama view of hell's in training,  
After the style of Virgil and of Homer,  
So that my name of Epic's no misnomer. (200)

我が詩は 叙事詩として書き

12巻に分けるつもり。各巻に唄うは

恋愛、戦争、海上の強風、

船のリスト、船長、君臨する王、

新しい登場人物、そして エピソード三つ。

訓練中の地獄のパノラマ式景観。

バージルとホーマーの詩体をまねるとしよう

それゆえ、我が叙事詩の呼び名は誤りではない。

いかに真剣に 我々は このような方針を取上げることができるだろうか——つまり、それは 明らかに叙事詩そのものの伝統からすれば ほんのジョークに過ぎぬではないか。事実バイロンは、ほんの一時でも、訓練中にすべての、そのような計画をもち得たのであろうか？

このことへの答えを今するのは至難である。《ドン・ジュアン》の物語りが進みゆくにつれ——それが、かの他の“詩の<sup>ずるき</sup>snake” The Giaour の如く “lengthen its rattles” そのガラガラとわけのわからない音を引きのばすにつれ、バイロンは、実際、彼の新しい作品へのいくつかの計画を工夫しただろう。

例えば 彼は言った。ジュアンは フランス革命で彼の生涯を終らせ、一連の可能なエピソードを概要づけたのである。

しかし それらの可能なエピソードは たえず、移っていった。

1821年、彼の出版者、マレーに、ある一つの計画を、又、トマト・メドウインに 別の計画の概要を話した。後で 更に、ギリシアで 彼は 最初の16篇を 単なる“紹介”と呼び、この詩を150篇まで 引きのばすことについて話している。

これらの事実は 或る意味で バイロンが彼の詩について、最初の2篇を終へた直後、のべた計画につきのべた事を 支持し 資格づけようとしている。

“諸君は、私に、Donny Johnny の計画について私に聞いている。だが、私には計画は全くない。——計画は全くなかった。しかし、私には資料はあったし、現在もある。もし、それが不必要なのであれば 私は、その場、その場で、それを、あるがままに委せるだろう。勿論、大衆への正当な関係にも不拘。では何故、諸君、そのように書くことの魂が、そのライセンスなのか？ 少くとも、そのような許可の自由は、もし、望めば、あってよいだろう。

かくの如くバイロンが、ドン・ジュアンをかく過程で ドン・ジュアンに対

する如何なる実験的計画を試みたとしても、その計画が 多かれ 少かれ、スタートから不完全な、乱雑なものであったことは、かなり確信できる。彼のドン・ジュアン風の最初の試みは《ベポウ》であり、叙事詩的な表現は全くもっていない。しかし 彼は ベポウの詩の成功に充分励まされて、さらにこの実験を ドン・ジュアンの最初の2カントにも 続けようとしたのである。もともと、この時でさへ “wait and see” (成行をまつ、静観する) 的態度で、この企画を考えた。

“If it don't take, I will leave it off  
where it is, with all due respect to the Public.”

一つの点で、すべての、これらの事実は、容易に理解されうる。何故ならば、それらは我々の生活の諸相を取扱うやり方と違ってはいない型を例証しているから。さらに、諸の事実は それとわかる程、その性格上、バイロンのである。ドン・ジュアンがある計画をもつことなく始められたことは、しかも 構成中に、それが、それ自身の周囲に その形を集めたことは 完全に、我々がバイロンのふるまいと知ることと一致しているように思える。バイロン詩の多くは、合成のプロセスを通して発展する《The Giaour》のみならず、《Childe Harold》の各篇のみならず、さらに1822年に バイロンが取上げて第5・6カントとして 延ばしてもよいと考えたものの全てがそうなのである。バイロンは生まれつき、気まぐれだった。もっとも極端に敏感だったが。

このことが、バイロンの独特の“自然性”を証明するのである、というのは、彼は——彼自らを描くジュアンや、レディ・アデアインの如く——常に最も身近かなものによって影響される人物なのであるから。(D・J XXI, 97) 構想をもたぬ叙事詩は バイロン如き——ギリシアへの最初の旅の間も、また同様に、無計画にエンジョイした——人間には、十分にノーマルであるように思える。

“僕の次の行動は 明日 モリア地方へとおもむくことだが、そこで多分、

1～2ヶ月滞在し、そしてここアテネに 冬、帰るだろう。もし僕の計画が変らねば……。もっともそれは とても変り易いが……。

僕は僕の気持が起り、退くまを 君に通知する。というのも 僕にちゃんとした計画がある如く振舞うことは 僕の場合、馬鹿げたことなのだから。”

と、1810年7月20日 母宛に、1810年10月2日、ホブハウス宛に書いている。しかし、もしこのすべてが 致命的であると理解され、そして バイロンのスタイルの魅力の一部が致命的であると理解されるなら我々は、なお、そのことで ショックを受けるかもしれぬ、特に、《ドン・ジュアン》の文脈に。

“私の詩は 叙事詩である” そうバイロンは述べている、そして今日、我々はなお、この事実を（不安だけれども）認めている、というのは、それはたしかに長詩であるから。しかしバイロンの叙事詩的表現（DJ 1. 209）は異常に思え、そして Pound's cantos の如き詩が、第2に到来するまでは、ユニークに思える。

誰がバイロン以前に“構想なしに”叙事詩を書くことを考えただろうか？ 誰一人もなかった。\*

\*Ariosto が可能な例外です。アリオストの、自由にして、形式的ゆき方 そして柔軟性あるスタイルをバイロンは讃え そして《Childe Harold 1. II》の中で はっきりと模倣し 又、《Don Juan》を通じて ずっと暗に模倣した。

叙事詩を書くことは 全生涯として、すべての熟慮を以てしても 尚足りぬ程の、すばらしい大規模の詩的主張だった。ミルトンとワーズワースの場合、ちょうど キーツのメランコリーの失敗が しばしば一人の野心的詩人の何百という文学上の過去の重荷について 酔いをさます教訓として、しばしば くだくど言われたように、詩人が 叙事詩の課題に近づこうとする真剣さの、英国的抜群の実例である。しかしバイロンは、この叙事詩的態度をものともせず、飛翔し、そして、彼は充二分にこの事実を気付いている。

ドン・ジュアンは、換言すれば、ほとんど諸の関係で矛盾だらけである。構

想をもたぬ叙事詩である。その特異の叙事詩的性質は、実は、絶えず善良な、更に、共感する批評家達の心を混乱させて来た。たとえば、誰もまだ、正確にはそれがどのような種類の叙事詩なのかわからぬように思える。その名前は多趣多様である。近代叙事詩、諷刺的叙事詩、否定的叙事詩、模擬的叙事詩、浪漫的叙事詩、叙事詩的小説、詩でかかれた小説、写實的叙事詩、——そして其他等々。

この暗黒部の巢に、均しく困惑するようなこの詩の意図が関係している。バイロンがこれは構想なきものだと言ったとき、彼は只単に、後の批判文字の題詩を書いたに過ぎないので、それは、この作品の明かに形態を缺くことと取組み合い続けている。

コウルリッジが言ったように、物語り詩の意図は連続物を一つの全体と考えることなのであり、そして我々が肯定する形態の考は、絶えずこの考を是認し続ける、そしてそれは 少なくとも アリストートルの如く古いのである。だがしかし、《ドン・ジュアン》の形態が、たとへ、どうあろうと、この詩は、コウルリッジの意味する連続物を、全体に変えてはいない。この詩は、根本的に、積極的に、挿話的に、曲折漫歩してゆくのである。

“The Friend”の中で述べたコウルリッジの評言は、《ドン・ジュアン》の物語り風のメソッドについて わかり易く述べたものかもしれぬ。コウルリッジの評言は メソッドと、それを缺くことの相違について強調する意図なのである。

聴け……無智な一人の男の声。おそらく彼の特別の呼び声に、鋭く、立派ではあるが。たとえ 彼が記述しようとしているのか、語ろうとしているのか、いずれにせよ、我々はすぐに気付くことだが 彼の記憶のみが、行動へと呼び込まれる、しかも、その対象と出来事が、物語りの中で 同じ順序で循環する、そして 同じ伴奏で いかにも偶然的であらうと、不適切であらうと、最初にそれが、話者の心に浮んだままを。息をつく必要、回想の努力、その失敗の突

然の調整がすべての休止を必要とする。そして the “and then”, the “and there” そして、さらに無意味な “and so” を例外として、それらは、同様に、彼のすべての関連を構成している。

多少 修正すれば この文は《Don Juan》の“メソッド”の一つの叙述となり得よう。実に、Alivin Kernan による《Don Juan》に関する最近の、最も興味あるエッセイの一つは 明らかに この詩のメソッドを “and so’s” と “but then’s” の連続だと定義を下している。

Kernan は この詩を、このメソッドを述べ、かつ、ほめ讃えている。しかし、コウルリッジにとって そのような方法は、馬鹿げており、無知のメソッドである。

《Don Juan》の構造を発見しようとする努力は 私の信ずるところでは、詩に関し 我々は経験する飛び切り最大の困難事である。《Don Juan》そのものは 双方の意味で 形式を拒む故に、もし 我々が そもそも この作品の意図を自意識強く理解しようとするなら 詩 (について) の構造についての我々の通常の考を放棄することから始めねばならぬと思う。結局誰も知る如く、この詩は 休止し——終わらぬ。また、《Don Juan》は、真面目な話だが、断章 となることで弱められることはない。たしかに 結局、我々が経験する唯一の悔恨は、バイロンと共に彼の詩をさまよい行くことはできないということである。我々は亦 この “English Cantos” の未完の状態と、それらが展開する特別のエピソードを 正当に いかんに思うことができる。しかし たとへ このエピソードをかき上げるまで生きのびていたとしても、この詩そのものは、実質的に変ったり、完成の、より威大なレベルに 到達しなかっただろうに。事実 我々が持つ、この作品の、終りから二番目の節は この詩の考へうる すべての状態を完全に述べる詩行で始まっている。いかに、この詩が終わったとしても、どこで これが終始したとしても バイロンは やはり こう言いたかっただろう：

“僕は このことに、凡てのもの如く、一つの問題を残しておく” (XV

## II. 13)

それなら《Don Juan》の残した問題を理解するため 我々は はっきりとこの作品のもつ 終始一貫した関連問題を調べねばならぬ。既に示唆した如く《Don Juan》の意図に言及する方がよいと。何故ならこの作品の模造 或いは 形態について語るには 誤解し易く 困乱を招くから。この用語“Structure” or “form”の相違は 大して重要でない：というのは、“Structure”も“form”も いずれも 完成し、仕上がった作品を意味するが しかし “design”は、そうではない。“The Prelude”は 只単にWordsworthの偉大な、計画された作品の最初の部分である、だが この詩は それにも不拘、完成されていて、それ自身にとって、完成なのである。《Don Juan》は かくの如く 終結してもいないし 完全でもない。むしろ、ある批評家が 述べた如く、《Don Juan》は “不純な芸術” 作品なのだ。しかも、もし この詩が完全だとしても、それにも不拘、この作品の中に 意図を認めればよいだろう。何故なら、“意図”とは、働きゆく、動き進む意志、気持、意向の始め、そして、中間の概念なのだから。OEDの語によれば、“design”とは “Conceived in the mind and intended for subsequent execution : The preliminary conception of an idea that is to be carried into effect by action ; a project” であるから。

すべての敏感な《Don Juan》の批評家は、——多くいるが——この詩の、実験的、“予備的”性格を認めてきた。あたかもそれが頁の上の、文字通りの執行が 両方の意味での、予備的意図を意味した如く、亦、あたかも この詩が絶えず、工夫しつつ、以前の意図——（しかし それは、どこかの点で、蘇るだろうから）——を消しさるかのように。

これに、たとえば、もし笑いがねらわれているなら 我々が突然 “その後すぐ、そのように二重に真面目”に放置される《Beppo》(632)のを むしろ気付かないようである。それでゆく枝葉抹節の部に逃げ込むのに密接に同類なのである。

この理由で Helen Gardner は機敏にこの詩をバイロンが“絶対的確信”を使用して 最初の実験として述べている。

《Don Juan》の秩序は要するに、意図の秩序、であるので、或いは、もっと適切に述べれば、その意図なのである。それが バイロンの叙事詩の意図なのである。

## II

《Don Juan》の意図は——これが事実、作られ、出版された期間中——バイロンの叙事的プロジェクト中 ほんの一部に過ぎないのであるが、もっとも、それは、もちろん決定的、最も秀れたものであるけれども。

しかし、我々には充分には理解できぬだろう、この作品の意図が、もし我々がバイロンの初期の経歴に後退しなければ。というのは、《Don Juan》は計画されない叙事詩だけれども、そして、バイロンが積極的に企てることに抗したものだけれども、それは亦、彼が、永い間 生きてきた叙事詩のプロシエクトでもあったのだから。

しかし、彼は最初から そのプロジェクトについて ambivalence (反対感情の並存) であったので、その ambivalence の完全な history は、彼の文学及び世界の移り行く経歴の中で明白である。

《Hours of Idleness》即ち、彼の最初の詩についての公にした volume の、序文の中でバイロンは こう述べている。これが つまり “ほんとうの詩人のリストの中に入り込もうとする” “最初にして、最後の試み” となる筈である。

彼は この分野において 単なるおせっかいやき として彼自身を紹介する。そして、この《Don Juan》の本を Self-description (自己軽視、卑下) の研究された姿勢で 公に差し出している。公然と自分の真剣な野望は文学に非ずと告白しながら、さらに続いて 早まった (事実後、我々が判断するに) こっけいなほかに、実現されなかった約束、つまり、詩人として 二度と公に、絶



対に現れないという約束をする。この本そのものが、多くの parallel (並列の、同方向の) ambivalence (反対並存感情) をもっている。真面目な、シニカルな詩——諷刺的かつ、勇ましい、喜劇的であり、かつ悲劇的でもある——が、すべて集められている。この本は亦、徹底的に派生的でもあり、しかも、とても個性的でもある。要するに詩は、ここでは、バイロンの、世に向って、彼自身の公の記録を与える伝達手段なのである。それは彼の主要な天職を予期し、更に宣言している。一冊の本として、それなら、本質的には“Descriptive Sketches”とか“Lyrical Ballads”とか、Keatsの詩の、処女詩集の如き作品に似ていない。というのは、それから作品は 詩の感受性、詩的野望の産物であり、そのどちらもが バイロンが真剣に“Hours of Idleness”の中で意図しているものではない。

そのときバイロンは、しかしながら、彼自身のことも 世の中のことも そんなに充分には理解してはいなかった。この書に対する最初の批判的反応は、むしろ厚意的なものだった。そして それが 作家としての名声をかち取る見込みで とてもバイロンを昂揚させたので 彼は直ちに さらに、もういくつかの野望に充ちた詩的プロジェクトを始めた。最初のもは Botswarth Field に関する heroic poem だった。そして 第二のものは 同時代の英詩の批判的 survey, “British Bards” であった。この二つの作品はバイロンの poet としての彼自身に対するバイロンの態度の変遷、移行を代表するものである。“私は今、真剣であるつもりだ” (DJ, X III, 1)

“Botswarth Field” と “English Bards” の主題は より慎しやかな やり方で “Hours of Idleness” の中で しばしば予知されている。バイロンは “Hours of Idleness” を通じて、文学の現状と固有の機能に関して コメントをばらまいている。そしてその the heroic element もしばしば——Newstead Abbey の詩や、The Ossianic exercise や、the Episode of Nisus and Euryalus の長い翻訳の中でも現れている。

しかし “the Satirist”、そして特に “the Edinburgh Review” の中の一対の、痛烈な批判的記事が も一度 バイロンをして、転向せしめた。彼は早熟の heroic poem を破壊し “British Bards” に関し真剣に取組み始めた、そしてそこで 彼は広い基盤に立ち、極端に個人的な諷刺で復讐を試みる積りだった。彼は この詩の中で 詩形について、そして、更に、技術について、あまり関心を持たぬことを公言したが、明らかに彼の個人的名声については 大いに関心を示した。

And though I hope not thence unscathed to go,  
 Who conquers me shall find a stubborn foe.  
 The time hath been, when no harsh sound would fall  
 From lips that now may seem imbued with gall ;  
 Not fools nor follies tempt me to despise  
 The meanest thing that crawl'd beneath my eyes :  
 But now, so callous grown, so changed since youth,  
 I've learn'd to think and sternly speak the truth ;  
 Learn'd to deride the critic's decree,  
 And break him on the wheel he meant for me. (1051-60)

そして私はそこから無傷で進むことは希まぬが私を征服する者は頑固な敵を見出すだろう。時勢が続く、いかなる不快な音も、今は、すり傷で汚されていない唇からこぼれぬような。愚か者も愚行も蔑む気にはならぬ、私の眼下に匍う最も卑しきものをも。しかし今、若き日より、いとも無感覚に長じ変り私は学んだ、考えること、真実を厳しく語ることを。批評家の固苦しい布告をあざ笑うことを学んだ。そして彼が私にしかけるからくりをうち返すことを。

バイロンは この詩を書き上げ、そしてそれが出版にかけられたとき、グラランド ツアに向けて ホブハウスと共に英国を發った。そして自らの詩への最後のゼスチュア、そしてそれが攻撃をしかける筈だった世間は、いかにもバイロンの<sup>はか</sup>だった。囮られた軽蔑、侮辱だった。

この若き日のストーリーは いくつかの 重要にして 且つ 循環するバイロンの性格を例証している。彼の名声への明白な<sup>なげ</sup>希いについての 彼の心の葛

藤が 特に注目できる。生涯を通じて 彼は ペトロ ガムバの如き友達に “詩は当然 the idle を occupy するのみである。” (hence Hours of Idleness) 彼が妻に語ったところなんだが：“僕は、むしろ行動の才能を好む。” 彼のこのテーマに関する宣告は有名である。そして そのうちの最も いちじるしいもの2つは、それぞれ、1813と1817年に 出ている。

Who would write, Who had anything better to do? “Action—action—action” —said Demosthenes— “Actions”, “I say, and not writing, — least of all, thyme.

If I live ten years longer, you will see, however, that it is not over with me—I don't mean in literature, for that is nothing ; and it may seem odd enough to say, I do not think it my vocation. But you will see that I shall do something or other—the times and fortune permitting—that, “like the cosmogony, or creation of the world, will puzzle the philosophers of all ages.”<sup>16</sup>

誰が書くだろうか？ 誰が為すべき より良きものをもつだろうか？ “行動だ、行動だ、行動だ” と Demosthenes は言った。“行動だ、行動だ” いいか、書くことぢやないぞ——とりわけ rhyme 詩をかくことではないぞ。

もし僕が もう10年 長生きすれば、しかし、君にはわかるだろう——それは、オーバーではないね。僕は文学のことを言っているのではないよ。というのは、文学は、とるに足らぬことだからね。そして、こういうことも へんてこなようだが、僕は 僕の天職と考えてはいない。だが、君にはわかるだろう、僕が something or other なにかをやるだろうと——時と幸運が許せば—— “宇宙哲学とか 世界創造の如き、あらゆる時代の哲学者達を惑わせるだろう、なにかを、やるだろうことをね。”

しかしながら、ひとしく 明白なことは、バイロンが epical pretension 叙事詩的見せかけ に心をひかれたことだ。未だ21才に満たざる若者として この見せかけは、主として noteriety (有名) を求める希いであるように思える。後年 彼は成人して、“体質的にそして” その結果において power (力) である、人間の心を支配する影響力を得るための目的ではなく手段としての “文

学の力を より自意識的に 理解するようになった。文学への、この機械的  
態度が、バイロンから立ち去らなかつた。それは丁度、すべての詩的 mode 様  
式の中で 最も直接的機能である諷刺が バイロンの全ての作品、物語や劇に  
対してすら いつも 決定的、重要性を帯びていたように。後の chapter では  
バイロンが いかにか 彼の心の中で 彼の文学的生活についての意義を変形  
せねばならなかつたのかを我々を見るであろう。即ち de-aestheticize (唯美的  
に反対すること)、それを雄大な、公のものとする、そして、それ故、文学  
を歴史の中に put into 流入させるし、歴史を文学的形態の中に流入させない  
ことである。

バイロンの 1807-1808年の文学的キャリアも亦、彼の作品の、根本的には、  
特別の場合の性格を強調している。この事実、《チャイルド ハロルド  
I—II》の出版まで 1809~12迄、さらに強調されている。バイロンは ギ  
リシアへの旅を続けて 詩の中で まさに 彼がやめたところで 諷刺と知り  
合った。彼は1811年に アテネで、Hints from Horraceと The Curse of  
Minerva, を、つまり、前者は 労を惜しまぬ努力をして、後者は 心情を吐  
露して唄った。これら年月の他の主要作品は、《Childe Harold》で これ  
はたしかに 諷刺的旅行談として始められた。しかし彼が書き続けるにつれ、  
その調子は、循環しながら、より瞑想的経路へと、そーっと入っていった。もっ  
とも その原型の中で風刺的なものとして 最後まで 終始したが。

彼が この詩を英国へ持ち帰ったとき 彼は最初は Childe Harold を出版  
すべく差出すことを多少、気にそまず、出版される the Hints 即ち English  
Bards and Scotch Reviewers への続篇として、心の中に意識的に形成された  
作品を見ることに、より関心、興味を覚えた と公言した。

しかし、周囲の事情は この計画に反作用した というのが実情だった、そ  
して 全く正反対のことが起こった。しかも亦、別の、意義深い、反対のこ  
とが、又、付随的に起こった。Childe Harold は、出版されるうちに根本的に  
その道徳的、かつ、諷刺的スタンス (足の位置) から、それ故に 有名となっ

た 瞑想的憂鬱さへと 移り変わって行き、母の死を含む5度の死が、大いに、この詩の、かくの如き変化の要因である。もっとも今でも我々にはわかるのだが、この作品の、この初期の変化は、ほとんど、どの方向にもあてはまるに充分な程の ambivalence (反対感情の並存) 的なのであった。バイロンが みずから詩について語ったように Beattie の authority 典據 を次の如く引用している。

The stanza of Spenser ... admits of every variety . Dr. Beattie makes the following observation : “Not long ago I began a poem in the style and stanza of Spenser, in which I propose to give full scope to my inclination, and be either droll or pathetic, descriptive or sentimental, tender or satirical, as the humor strikes me ; for ... the measure ... admits equally of all these kinds of composition. “Strengthened in my opinion by such authority, and by the example of some in the highest order of Italian poets, I shall make no apology for attempts at simi-lar variations in the following composition. <sup>19</sup>

スペンサの節...は あらゆる変化、種々相を容認している。Dr Beattie は次の如き意見をのべている。“そんな昔のことではなく 私は スペンサの詩風と節で 詩をかき始めたが、その中で私は、私の性向への全面的展望をのべ、そして、私の気分のおもむくままに、道化的なもの、或いは、悲愛的なもの、どちらにするか——叙述的なもの、それとも、感傷的なものであるか——優しいものであるか、風刺的なものであるか——のいずれかにしようとするつもりである。 というのは the measure (その感情の測定) は ひとしく、これら すべての種類の気質、気分を容認しているから”

かくの如き 典據によって、かつ又、最高級のイタリア詩人達の、幾人かの範例によって、私の意見に力を得て 私は、次の如き文の、同じ変化の試みを企てて、何の弁解もしないつもりである。

問題はこうなんだ——ある偶然性が、1807~12年の間のバイロン作品にはひん発する。そしてこの年月の間の、この型に注目するとき、バイロンの生涯を通じて いかにかこれが偶然性を浸透しているかを理解できるだろう。

彼の若き日 彼はある試験的考案、或いは計画から始めたが、彼はそれらを、——周囲の状況と共に移し変えうる、そして オリジナル（本源）な、あいまいな意図をそのままに 急にそれることが できるようなやり方で——組み立てているように思へる。そして それもまた最終的決定ではないのである。というのは バイロンは すべての箇所ですすんで より前の意図を取りあげようとする みずからのムードに身を任せている。

《Childe Harold》1-11が バイロンにとって 重要な作品であるのは 只これが 最終的に彼の名声を樹立したからだけではなく、さらに、この作品が——いかに月並なやり方であれ——彼の性格の気質にぴったりあった詩風でこれを定着させたからである。彼は言った、“この作品は、Ariosto のプランによる詩、即ち、全くプランをもたぬ詩とするつもりだった。” 1811年、彼は言った。“何一つとして私の自信のもてるものはない”と。そして、まだ、この旅をしている間、“私自身の意図について、ほとんど知り得るものなし”と言った。そして、彼がギリシアにいた間、バイロンの生活の特別の性格の全体が、この無計画なもの、偶然的なものへの、この貪欲を要約している。

グラント・ツアー 以後のバイロンの生涯は、これら若き日において見る行動の型を例証し、かつ、バイロン作品は 彼の行動及びその反作用の根跡をもつ。

バイロンの世の中で 実際の “影響力を及ぼす権力を得たいという願望は 繰返し繰返し、しかも、ほとんど故意に（わがままに）環境、即ち、かの現世的な神”との衝突に 出くわすのである。（Childe Harold IV, 125）

この循環する葛藤が 彼の克己（禁欲、ストイシズム）と移り気の双方を確立し、定着させるのである。

同時に バイロンの名声と権力への喝望そのものこそ、そして、これらが文学に於いてしかと実感されねばならぬという、彼の若き日の未熟のセンスが、決定的に、予知できる、そして、予知できぬ世界との衝突、葛藤によって 決定的に影響され、左右されるであろう。

結局、これらの、衝突、軋轢、葛藤のどれ一つとして、解決されないであろう。 なにもかも、すべて問題をのこしている——例へば愛情、恋愛のこと。《Hours of Idleness》（懈怠集）の中でバイロンは それを《To Romance》として 嘲笑し そしてそれを 滔々として まくしたてている（The first Kiss of Love）。 この pattern が執拗に続いた、そして 2～3 の叙情詩の中で この型は、結局、すばらしい詩となった、バランスのとれた音調に終るのであった。

So we'll go no more a roving  
 So late into the night,  
 Though the heart be still as loving,  
 And the moon be still as bright,  
 For the sword outwears its sheath,  
 And the soul wears out the breast,  
 And the heart must pause to breathe,  
 And Love itself have rest.  
 Though the night was made for loving,  
 And the day returns too soon,  
 Yet we'll go no more a roving  
 By the light of the moon.

かくて我々はもうさまようのをやめよう  
 こんなにおそく 夜の世界を  
 ころはなお愛しつづける そして  
 日はなお 明るく 照らしているも  
 というのは 剣は輝き 使い古し  
 そして魂は 胸をすりへらし  
 そして心はとどまり 息づかねばならぬ  
 愛はみずから 憩わねばならぬ  
 夜は愛するために創られ  
 昼はあまりにも早く かへり来るが  
 しかしもう さまようのを やめよう  
 月光の明りを たどりながら

愛そのものは憩わねばならぬ。だが所詮、“夜は愛するために創られていて” 眠るためではないのだから、どこで憩いを見出すべきか？ だが、“剣はそのさやを使い古した。” だから彼は 憩わねばならぬ、憩うだろう。“だから、我々も、もう、さまよい行くをやめよう”

それは 彼がしぶしぶ言うことであり、しかも、この場合に、適当な最終的、様相のすべてにおいて。というのは これは折にふれての唄なのである。そしてそれが述べているのは、その時の決定としてまさにぴったりとふさわしい。

もはや（～をやめよう）、さしあたって。 たぶん、そのほうが、より良いだろうけれども。もしそれが 決してこれ以上ないのであれば、即ち、これが可能ならば、だが そんなことは 絶対ないのだ。というのは、他の別の、叙情詩が、同じ可能性を次のように述べているのだが、

and now again,  
Borne in our old unchanged career, we move ;  
Thou tendest wildly onward to the main.  
And I—to loving one I should not love.  
（“Stanzas to the Po”）

そして今、ふたたび

われらが古き変らない経歴に生まれ、我ら動く

汝、最も優しきもの、奔放に本流に向かって進む。

そして私は——私が愛してはならぬ者を愛しつつ。

（ポー河によせるスタンザ）

この愛に対する反対感情の並存、及び、バイロンの葛藤と解決できぬ片意地の無能さが、文句なしに、彼の生活及び作品の中で、すべてに浸透する性質を説明している。愛への衝動そのものが、公然と有益な生活への、より勇ましい自負、主張と、葛藤し、衝突し、ぶつかり合い、これらの あつれき、種々相の異なる関係のパターンの中で 例へば、サーダナパラス 或いは “島” 或いは、“この日 僕は36才の生涯を終る” など、増殖して行くのである。同様に “Bos Field” を書き、そして——なんらかのやり方で——そのよう



な場所で終るであろう生涯を生き抜かんとするバイロンの相葛藤する願望も亦未解決のまま残るのである。

《Don Juan》は バイロンが 再び ギリシアで そのチャンスをつかむ如き中間の生涯で放置される。 バイロンは順次に——自分が、それらの歴史的悲運に 決定的に、最終的にまき込まれるだろうと考えたとき——ギリシア民族・英国民族、そして イタリア民族に絶望していた。しかし愛故に、彼は不変の経歴、生涯へと運ばれゆき、そして、も一度、ギリシアへと再び、おもむくのだが、それは、行動の生活における 決定的でなく、最後の攻撃においてだった。彼は死んだ、だが、しかし、それで、すべてが彼にとって終わったのではなかった。

文学に関してはその型は同じなのだ。彼はそれを放棄し、それを絶ち、それを否認している。——だが、しかし、とに角、彼はそれを続けている。文学そして“なぐり書き”に対し嫌悪感を公言した、さほど多く——誰なのか——ではなく、より猛然と書きまくった、或いは、もっともっと、より大きな効果をもたらした。結局、彼は更に、彼の自負（みせかけ）のこの相と譲歩し、そして、自らに向って、自分の気取り（かくの如く彼はこの語を更新するかも知れない）は正当に文学の世界にも伸長してゆくことを、認めねばならぬだろう。Childe Harold IV (Stanza 9) の中で、彼は 彼の運命を文学に求める最後の決意をしたように思える。だがしかし炭焼党の活動は 再び彼を、一時、（この決意を）疑問視せしめた、そして結局は 彼は、愛と文学をすて ギリシアへと、死を求めて 立っていった。

### III

バイロンの生涯の全ては、このような種類の動き。そして 揺れの からみ合いなのである。そして私の興味、関心は これら すべてにあるが、ここでの私の主題は《Don Juan》であり、そして バイロンの とりわけ文学的経歴の中での《Don Juan》の占める地位、立場なのだ。次の章で 次に私が

示したいことは：先ず第一に、heroic poetry に対するバイロンの衝動と抵抗の pattern (型) である。

第二に 叙事詩の伝統の中での、ある主要人物、特に Milton をバイロンが意識的に使用したこと。

第三に 叙事詩の性格——つまり、彼が最終的に創み出した性格——である。このエッセイ全般は結局——何故に叙事詩をかいた彼の時代の詩人の中で、バイロンが、近代詩としての、叙事詩の問題を徹底的に解決した唯一人なのかの理由——を述べるつもりである。私は ここで2つの評言を引用しよう。その一つは、Virginia Woolfe によるもので、今一つは、Yeats によるものである。そして、この二つの評言は 私の、これからの、バイロンの業績の特殊性について私が述べようとすることを予知し 見越すものである。

It is most readable poem of its length ever written, I suppose : a quality which it owes in part to ... its method. This method is a discovery by itself. It's what one has looked for in vain—an elastic shape which will hold whatever you choose to put into it ... he could say whatever came into his head. He wasn't committed to be poetical and thus escaped his evil genius of the false romantic and imaginative. My own verse has more and more adopted ... the syntax and vocabulary of common personal speech. The passages you quote [from *Childe Harold IV*] ... are perfect personal speech. The over childish or over pretty ... element in some good Wordsworth and in much poetry up to our date comes from the lack of natural momentum in the syntax. 'Tis his momentum underlies almost every Elizabethan and Jacobean lyric and is far more important than simplicity of vocabulary. If Wordsworth had found it he could have carried any amount of elaborate English. Byron ... is I think the one great English poet ... who sought it constantly.

これは 今まで書かれた この長さの詩の中で 一番読み易い詩だと私は思う。つまり、その method (方法) を部分的に、(それに) 負っている質のことを言うのだ。

この方法は独力での発見なのである。それは人が 探し求めて空しく終わったもの——諸君が それに入れるべく自由に選ぶ、どんな形にも保つ、その伸縮自在の形態……。つまり彼が、彼の頭に浮かぶ どんな形を言ってもよい

のだ。彼は詩的であるべく、委ねられていなかった。かくして まちがったロマンティックにして想像的なものについての彼の evil (悪しき) 天才を免れたのである。

私自身の詩が益々多く ふつうの人々 (庶民) の話しことばの文章構成法及び 語らいを多く採用してきた。あなたが Childe Harold IV から引用した passage 文は完全な、personal speech (個人的ことば) である。あまりにも子供じみた、あまりにも美しすぎる (いくつかの立派な Wordsworth 的の中の、そして、今日に至るまでの、多くの詩の中の要素は文章構成論の中での、自然的 momentum の缺如から来る。この momentum が、ほとんど、すべての、エリザベス 及び、ジャコビアン (英国王ジェームス I 世時代 1603-1625) 時代の叙情詩の基底に流れる、そして語らいの simplicity (単純さ) よりも、ずっと、はるかにより重要なのである。もし Wordsworth が、このことを発見していたとしたら、彼は、いくぶんかの丹念な、入念な、英語を身につけることができたことだろうのに。

バイロンは 私が思うに、このことを、絶えず求め続けた唯、一人の、偉大な、英国の詩人であった。

Woolfe の評言は主として《Don Juan》の“Form”について 述べたものだ。そして一方、Keats は Style 詩風——最も、せまい意味での——のことに集中している。我々にも解るように これらの陳述の、それぞれは、相手の論述を予想し、からみ合っている。さらに《Don Juan》がそのような“form”そして そのような、“style”の故に うまく処理している格別にバイロンの関係は バイロンの叙事詩の様式に対する計画しない意図によるのである。

バイロンの叙事詩における特異の業績は、“もし バイロンが なんらかの時機に、彼自身を、より意識的に、或いは、より、きっぱりと、或いは、より決定的に、叙事詩に取組んでいたとしたら” 決して可能ではなかっただろうに。バイロンは 大いに、文学的、そして、他の意味でも、その過去に、影響され、左右された、だが、しかし 彼の人一倍、気まぐれな、文学的伝統へ

の関係が、不安な、ロマンティックな時代において、特異な“過去の重荷” — 19世紀、及び、20世紀の、他の、英国の詩人たちが、詩において、野心的計画に着手したとき、そのもとの、苦しんだのだが——から 彼を救ったのである。

(以下、次号)

#### 参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford : Byron, Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge ; The Poetical Works of Lord Byron : Vewis Prints
- 3) Leslie, A. Marchand : Byron's Poetry, John Murray.
- 4) Francis, M. Doherty ; Byron.
- 5) John, D. Jump : Byron, Rontledye and Keygan Paul.